

# 巻頭の言葉

京都文教大学人間学研究所所長 西川 祐子

今年度も、人間学研究所の三つの共同研究班はそれぞれ活発に活動することができました。「物語と現代社会」班は、講演会や狂言、能などの古典芸能の世界と現代の物語の対話などさまざまな企画を世に問い、今号には「戦後日本美術の物語：その西欧における受容」の講演会記録を残しました。「ニュータウンのある『まち』」班は、京都市向島ニュータウンと宇治市のグリーンタウン檜島に隣接する京都文教大学の立地条件を生かし、地域の方々との交流をふかめる催しを実施するとともに、これからのニュータウンにおける多文化共生という、日本各地だけでなくグローバル社会における時事的問題に取り組んでいます。「個人の思想形成と蔵書の研究－京都文教大学図書館所蔵の鶴見和子文庫を手がかりとして－」班は、京都文教大学図書館と協力し、また外部の諸研究機関と研究交流をしながら、本学所蔵の鶴見和子文庫から、戦後思想の批判的継承を行うべく、文献に基づく実証研究を積み重ねています。

この二年の間に学内の諸研究班や諸部局との共催、学外の研究機関との学術交流の機会が増えて、人間学研究所の発信範囲がわずかながら広がったように思います。これからも諸機関が切磋琢磨し、共に企画を練り上げることにより、限りある予算を有効につかい、企画に参加するリピーターの方々の貴重な時間をより充実したものにするができるかもしれません。

2007年度の間人間学研究所独自の事業としては、6月23日に公開シンポジウム「生活綴り方から『戦後』を考える－鶴見和子文庫をひらいて－」（於京都市国際交流会館）を開催し

ました。これは2006年度の連続公開ミニ・シンポジウム「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫から思想と方法論の水脈をさぐる」全四回の成果をふまえ、学内外から広く聴衆をあつめて実施したものです。本号には今年度の公開シンポジウムの記録を収録しています。みなさまのおかげで、小さな研究所から持続的な発信を行う体制がようやく整ったように思います。

このシンポジウムを用意し、テーマの理解を深めるために毎週水曜日と木曜日に所長室を開放して行った参加自由の勉強会「ランチタイム・ワークショップ」は二年のあいだに思いがけない発展をしました。このワークショップをもとに、2007年度春学期には人間学研究所と学生たちの映画上映グループである宇治シネペックが共催して、本学指月アワーの時間に「レトロモダンな映画を観ながら『戦後』を語る集い」全四回、秋学期には「世界の映画を観ながら『地球』を考える－若者と子どもの目でみた社会変動」全四回の上映会を持ちました。

同じくランチタイム・ワークショップから鶴見和子が博士論文をもとに英文で出版した『社会変動と個人－第二次世界大戦における敗北の前と後の日本』の第6章「サークル：ある繊維工業労働者ライティング・グループ」を日本語に翻訳する共同作業が生まれ、その成果を本号に収録しています。

人間学研究所が少しずつ成長してゆくところを今後もぜひ見守っていただきたく、本号をもってそのご報告とします。ありがとうございました。